川上 高司 ブログ アーカイヴ

2018年

4月10日

世界はカオスの崖っぷち

4 月 7 日、シリアのドウマで化学兵器が使用され、多くの市民が犠牲になった。9 日には国連は緊急会合を持ち、この化学兵器使用はアサド政権によるものとし非難している。とりわけアメリカはトランプ大統領が「アサドには大きなツケを払ってもらう」と、軍事攻撃を示唆する発言をして世界は不穏な空気に包まれている。〈br〉

この世界からの非難に対してロシアとイラン、シリア政府は「アサド政権が実行したものではない、ねつ造だ」と反論している。だが欧米は聞く耳を持たず軍事行動へとまっしぐらである。

シリアではロシアの軍事支援のおかげで ISIS はほとんど勢力を失い、アサド政権側の勝利がほぼ確立している。ロシア、イラン、トルコの 3 カ国が、米露が打ち立てた和平の枠組みに代わって「アスタナ会議」の和平の枠組みによって内戦終結に向けて動き出したところだった。アサド大統領の存続は保障されており、あえて政府が化学兵器を使用するリスクをなぜ取るのか。しかもトランプ大統領は米軍をシリアから撤退させると表明したばかりだった。このままいけば、シリアはロシアとイランの影響下で再建されることになるはずだ。

しかし、そのような流れを受け入れられない国がある。シリアにはロシアの軍事支援の他に、イラン革命隊とレバノンの過激派ヒズボラが入り込み軍事支援を行っている。シリアでのイランの影響力が強まれば、当然ヒズボラも強化されていく。ヒズボラとイランを敵と見なすイスラエルにとっては看過できない情勢である。アメリカがシリアから手を引くならば「イスラエルはやるべきことを強化していく」と元国連大使は強硬である。

折しも 9 日にはイラン強硬派で鳴らしたジョン・ボルトンが国家安全保障担当補佐官に就任した。国務長官も強硬派のポンペオである。化学兵器の使用が本当は誰なのか、立証されることもなくシリアへの攻撃が開始される可能性は 2013 年の時より遙かに高い。前回と異なり今のアメリカの外交政策の暴走を止める賢者がいないのである。ロシアやイラン、ひいては中東を巻き込んだ世界的カオスに落ち込む崖っぷちに我々は立っている。

4月26日

思索派マティスのレッドライン

ボルトン補佐官が就任して 2 週間が過ぎた。就任まもなくボルトン補佐官はマティス国防長官を表敬訪問した。にこやかにボルトンを迎えたマティス国防長官は開口

一番、「キミは悪魔の化身なんだってね」と辛辣な挨拶をした。ボルトンは苦笑いをして流していたが、冗談というよりは本気で言っているような マティス国防長官のこの言葉は、深くて暗い過去からわき上がってきたような不気味な響きを持っている。

2001 年の 9.11 テロ以来、ブッシュ政権はイラク攻撃にとりつかれていた。とりわけネオコンと呼ばれるウルフォウイッツ国防副長官、ファイス国防次官、ボルトン国連大使などブッシュ大統領を取り巻く高官達はイラク攻撃を強硬に進めた。2003 年 3 月に米軍がイラクへと侵攻したが、その時海兵隊第 1 軍団を率いていたのが現国防長官のマティスである。当時はマティスはいち海兵隊員であり、ボルトンは政府高官だった。戦争の前線からはほど遠いワシントンからの声で彼らの運命は翻弄されていた。マティスがボルトンに対してなんの感傷も持っていないということはあり得ないだろう。

そしてイラク戦争がもたらしたのはアメリカ政治の凋落と、イラクという国家の崩壊だけだった。そして 15 年の月日が流れ、今やマティスはボルトンの表敬訪問を受ける側に身を置く。なんとも皮肉な運命である。

マティスは現役当時は過激な発言で物議を醸すことが多く、それがトランプには「威勢のいい直感的な人物」と映り、国防長官に指名された。だが、マティス自身は 5000 冊の蔵書を持つ思索派である。2003 年イラク侵攻直前、マティスは大量のレゴを待機していた基地に持ち込み、レゴを使って戦術を練りに練ったほどである。 まさにトランプとは真逆であろう。マティスの忍耐力がどこまで持ちこたえるのか。そのレッドラインを超えた時、アメリカの外交政策はどうなるのか。誰にもわからない